

こだわりの「あきたこまち」をお届けします

まいと
「米道ふたつ」の皆さん



首都圏で人気の手作りおむすび専門店「おむすび権米衛」は、都内を中心に26店舗チェーン展開しています。そのうち11店舗で二ツ井産の「あきたこまち」を使用し、好評を得ています。おむすび専門店に「あきたこまち」を出荷している、有会社「米道ふたつ」の皆さんからお話を伺いました。

二ツ井町では、環境に優しい、環境保全型農業の推進に町ぐるみで取り組んでいます。そして、安全でおいしい米を求めていた「おむすび権米衛」との取引が始まり、「米道ふたつ」では7店舗に出荷しています。「おむすび権米衛」からは、月に一度、食味調査を受けますが、いつも上位に入る高い評価となっています。

食味調査の評価基準は厳しく、おいしい米、減農薬減肥料による「安全」な米を作るのは当たり前とされています。さらに、信頼される生産者として

「安心」が求められます。

いろいろな人と出会う中で、広がりも生まれてきました。消費者との「身近な交流」が、農業経営のヒントを見つける上で、とても大事です。

今後、合併することで、能代が進められている地域づくりや二ツ井の環境保全型農業など、両方の良い所を生かしていきたいらと思っています。



「おむすび権米衛」の関係者が「米道ふたつ」の田で稲刈り体験！



のーろ道遙

歴史と民俗のあいだ

83

農林の記憶(三) 「榊米・田中親政」

赤沼・稲荷神社の境内に田中親政翁頌徳碑が建っています。大正二年の東北大凶作は、産業組合の育成を推進しました。農家が結集してこの難局を乗り越えることを求めたのです。榊村の産業組合はさまざまな手法を駆使して、榊米という銘柄米を作り出し、東京などの大都市へ積極的に出荷していききました。

昭和に入ってから凶作の時期も、生産者には品種統一や施肥の徹底を求め、消費者対策としては乾燥調整で米質を維持するなど、強力な指導を行いました。もちろんそれは一朝一夕にできるものではありませんが、藤田祐治・袴田玄之助ら歴代組合長の尽力と、それを支えた田中親政の手腕が優れていました。

昭和五年、田中が組合長になってさらに鋭さを増し、当時米商人として優位に立っていた宮腰常吉・安岡長四郎・藤田富五郎らの名だたる連中を追い越していきます。昭和八年には榊農業倉庫からの出荷量が大半を占めるようになりました。

その間に、横領事件などのゆがみも経験しながら、田中の指導による榊米の名声は全国に響いたものでした。(古内龍夫)

